



大学生の本来感や怒りの不快感に対する「もめごと解決力」の予測力

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益子, 洋人 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00006690 |

大学生の本来感や怒りの不快感に対する「もめごと解決力」の予測力

益子洋人

北海道教育大学札幌校教育心理学研究室

Predictable capability of integrating conflict resolution skills on sense of authenticity and discomfort to anger in university students

MASHIKO Hirohito

Department of Educational Psychology, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概要

本研究の目的は、もめごと解決力（統合的葛藤解決スキル）が、本来感や、怒りに対する不快感をどのように予測するのかを、短期縦断的、探索的に検討することであった。2キャンパスに在籍する、3専攻の大学生105名（男性29名、女性76名）を分析の対象とした。調査は、3ヶ月の期間を空けて、2度行われた（Time 1, 2）。もめごと解決力が本来感（Time 1, 2）、怒りに対する不快感（Time 1, 2）に与える影響を共分散構造分析によって検討した。その結果、もめごと解決力が、本来感（Time 1）と怒りに対する不快感（Time 2）を予測することを仮定したモデルが、もっとも適合度が高いことが示された。このモデルでは、もめごと解決力は調査時の本来感に中程度の正の影響を与え、3ヶ月後の怒りに対する不快感に負の影響を与えることが示された。もめごと解決力の適応に対する予測力について一定の知見を得た。

Key words：大学生，本来感，怒りに対する不快感，もめごと解決力，縦断的研究

問題と目的

ソーシャルスキルの研究が盛んに行われるようになり、注目されるスキルの種類も増加している。従来、取り上げられてきたソーシャルスキルは、全般的ソーシャルスキル（菊池，1988）や非言語表出スキル（後藤・宮城・大坊，2004）、対人認知スキル（松山・大坊・横山・藤原・谷口・磯，2011）のような、一般的な場面で使用可能なスキ

ルが中心であった。一方、たとえば本田・藤枝・益子・中井・富家（2017）は、これまであまり注目されてこなかったソーシャルスキルとして、「援助要請スキル」「感謝スキル」「統合的葛藤解決スキル」を取り上げた。これらは、従来のソーシャルスキルではカバーしきれなかった場面での活用を想定したスキルである。このように、ソーシャルスキル研究は、いま、より幅広い種類のスキルに目を向けるようになってきている。

ソーシャルスキル研究で扱われるスキルの種類が増加するならば、それらのスキルがいかに適応を予測するのかという議論が必要となるだろう。なぜなら、ソーシャルスキルは、もともと、個人の将来の適応を予測する変数として注目されてきた (Gresham, 1986) からである。新しいソーシャルスキルには、個人の将来の適応への予測力が未検討のものがある。したがって、新しいソーシャルスキルの将来の適応に対する予測力を検討することは、重要な課題だと考えられる。

本研究では、新しいソーシャルスキルの中でも、「統合的葛藤解決スキル」を取り上げる。統合的葛藤解決スキルとは、「日常的な対人葛藤において個人が用いる、葛藤当事者双方がおたがいに納得・満足して葛藤を解決するスキル」と定義される (益子, 2013)。いわば「もめごと解決力」のことである。これまでの横断的研究から、もめごと解決力は、友人関係満足度 (加藤, 2001) や、心理的適応の指標である「本来感」(Sense of Authenticity) (伊藤・小玉, 2003) と正の関連を持つことが報告されている (益子, 2013)。また、それを向上させる心理教育プログラムを通して、本来感を向上させるだけでなく、自他の怒りの感情を否認・抑圧したり、回避したりしようとする「怒りに対する不快感」を低減させることも示唆されている (益子, 2017)。このように、もめごと解決力の予測力は、横断的研究や介入研究から示されつつある。

しかし、外部から意図的な介入を受けない縦断的研究において、もめごと解決力が個人の適応にどのように影響を及ぼすのかは、未検討のままである。そこで本研究では、もめごと解決力が個人の将来の適応をどのように予測するのかを、短期縦断的研究によって検討することを目的とする。

適応を予測するための指標として、第一に、「本来感」を取り上げる。その理由としては、まず、本来感が、「安定的で、揺るぎない自己の感覚によりしっかりと基づいている」自尊感情 (本当の自尊感情 (True Self-Esteem)) を反映しているとされるため (Deci & Ryan, 1995)、適応の指標

になりうると考えられるからである。また、本来感とは、先行研究においてもめごと解決力ともっとも関連の見られている変数の一つであり (益子, 2013, 2017)、先行研究の結果との比較検討が可能である。したがって、適応を予測する指標として本来感を取り上げることには、意義があると考えられる。

第二に、「怒りに対する不快感」を取り上げる。なぜなら、怒りをどのように扱うかということが、適応上、重要だからである。怒りの感情を不快なものだと見なす人は、怒りを否認したり、抑圧したりしがちである (巖谷, 2001)。しかし、否認・抑圧された怒りは、身体症状となって現れたり、抑うつと関連したりする。突然暴力的な行動をとるなど、行動化を生じることもある (大河原, 2004)。逆に言えば、怒りを不快な感情であると見なさず、自然なものだと感じられる人は、これらの問題を抱えにくいと考えられるだろう。よって、怒りに対する不快感を取り上げることも、意義があると言える。

以上のことから、本研究では、もめごと解決力の本来感、怒りに対する不快感への予測力を検討するため、短期縦断的な方法をとることにする。それらの関連を検討するため、以下のような仮説モデルを構築した。まず、本来感と怒りに対する不快感には自己回帰を仮定した。一方、益子 (2017) において、もめごと解決力が、本来感や怒りに対する不快感に影響していたことを踏まえて、1度目と2度目、各時点における本来感と、怒りに対する不快感のそれぞれに、もめごと解決力の影響を仮定した。

ただし、もめごと解決力の、1度目と2度目の本来感や怒りに対する不快感への影響は、パスの組み合わせによって、上述した仮説モデルのようにすべてを予測すると仮定するモデルや、一部を予測すると仮定するモデル、まったく予測しないと仮定するモデルなど、全部で16通りのモデルを仮定することが可能である。また、それらの仮説モデルが統計的にもっとも優れたモデルであるかどうかを検討するには、モデル同士の比較検討が

必要であるとされる (Anderson & Gerbing, 1988)。これを踏まえ、西村・福住・藤原・河村 (2017) は、「この比較検討によって… (中略) …意味のないパスを引いているといったモデル作成における手続き上の問題を統計的に解決することができる」としている。そこで本研究では、西村ら (2017) の方法に則り、前述したような仮説モデルを踏まえながらも、他のモデルを構築する余地がないか、探索的に検討することにする。

以上、本研究では、もめごと解決力が、本来感や怒りに対する不快感にどのように影響するのかを、短期縦断的、探索的に検討することを目的とする。

方 法

調査協力者

北海道内の国立A大学の、別の地域にあるB、Cキャンパスに在籍する、3専攻の大学生105名 (男性29名、女性76名、平均年齢 20.17 ± 1.38 歳) を分析の対象とした。

調査内容

(1) フェイスシート

性別と生年月日を尋ねた。

(2) 統合的葛藤解決スキル尺度 (Integrating Conflict Resolution Skills Scale ; ICRS-S)

もめごと解決力の指標として、益子 (2013) のICRS-Sを使用した。「統合的志向」「受容・共感」「丁寧な自己表現」「粘り強さ」の4因子16項目から構成され、社会的スキルや友人関係満足度、対人葛藤方略との間に妥当性が確認されている。得点が高いほど、もめごとを統合的に解決できるスキルが備わっていることを表している。原版と同様に教示し、7件法 (1 : 全くあてはまらない ~ 7 : とてもあてはまる) で回答を求めた。

(3) 本来感尺度

伊藤・小玉 (2005) の本来感尺度を用いた。原版は1因子7項目で構成され、自尊感情や主観的幸福感、心理的well-beingとの間に妥当性が確認されているが、「他人と自分を比べて落ち込むこ

とが多い」という項目を削除すると信頼性が高まることが報告されている (益子, 2013) ため、6項目で分析を行った。得点が高いほど、自分らしく生き生きとした感覚を感じていることを表している。原版と同様に教示し、5件法 (1 : あてはまらない ~ 5 : あてはまる) で回答を求めた。

(4) 怒りに対する不快感尺度

坂上・菅沼 (2001) の「個別情動に対する意識的態度尺度」の「個別情動に対する不快感」因子をもとに、怒りに対する不快感を測定する尺度を構成した。1因子5項目で構成されている。私的自意識、公的自意識との間に妥当性が確認されている。得点が高いほど、怒りの情動に対する不快感が強いことを表している。原版と同様に教示し、5件法 (1 : あてはまらない ~ 5 : あてはまる) で回答を求めた。

手続きと倫理的配慮

質問紙の配布にあたり、調査の手引きを作成し、大学生の指導教員に実施・回収を依頼した。

1度目の調査は2016年X月に実施され (Time 1)、2度目の調査は同年X+3月に実施された (Time 2)。1度目の調査では、ICRS-S、本来感尺度、怒りに対する不快感尺度が配布され、2度目の調査では、本来感尺度、怒りに対する不快感尺度が配布された。

2回の調査は無記名で実施された。また、解答用紙のマッチングには生年月日を使用した。倫理的配慮として「完答の義務はないこと」「成績とは無関係であること」「調査後の用紙はシュレッダーにかけて破棄すること」をフェイスシートに記載し、調査時には学生の指導教員からも口頭で連絡してもらうように依頼した。

解析ソフトと欠損値の処理

平均、標準偏差、相関係数、信頼性係数の算出には、IBM SPSS 22を、欠損値処理と共分散構造分析には、AMOS 22を使用した。欠損値のない完全解答者は、1度目の調査では74名、2度目の調査では82名であった。なお、共分散構造分析を行う際には、完全情報最尤推定法 (FIML) による欠損値処理を実施し、105名分のデータを用い

て分析を行った。

結果

尺度の信頼性係数および基礎統計量, 相関係数

欠損値のない利用可能なデータを用いて α 係数を算出した。その結果, Time 1のICRS-Sでは, 「統合的志向」が.77, 「受容・共感」が.79, 「丁寧な自己表現」が.85, 「粘り強さ」が.87だった。また, Time 1の本来感尺度は.91, 怒りに対する不快感尺度は.70だった。一方, Time 2の本来感尺度は.72, 怒りに対する不快感尺度は.73だった。

このように, 信頼性係数は許容範囲といえる値だったため, 以下の分析では因子得点の平均を尺

度得点として分析を行った。

各尺度の平均値と標準偏差, 相関係数をTable 1に示す。

共分散構造分析による検討

ICRS-S (T1) から, 本来感 (T1, 2) や怒りに対する不快感 (T1, 2) への, すべてのパスの組み合わせを考慮すると, 全部で16通りのモデルを仮定することができる。それらを比較するため, 仮定される16通りのモデルのそれぞれに共分散構造分析を行った。なお, その際には, Time 1の本来感と怒りに対する不快感の間に相関を仮定し, Time 2の誤差項の間に共分散を仮定した。

Figure 1に仮説モデルを示す。また, 仮定した16通りのモデルの適合度の一覧をTable 2に示す。

Table 1 本研究で使用した尺度の平均, 標準偏差, 尺度間の相関係数

| | <i>N</i> | <i>Range</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>a</i> | <i>b</i> | <i>c</i> | <i>d</i> | <i>e</i> | <i>f</i> | <i>g</i> | <i>h</i> |
|---------------------|----------|--------------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|------------------|----------|
| a ICRS-S統合的志向 (T1) | 77 | 1-7 | 4.78 | 0.82 | - | .64*** | .57*** | .65*** | .27* | .04 | .15 | -.24* |
| b ICRS-S受容・共感 (T1) | 74 | 1-7 | 4.95 | 0.95 | | - | .32** | .36** | .25* | .10 | .23 [†] | -.04 |
| c ICRS-S丁寧な自己主張(T1) | 76 | 1-7 | 4.67 | 0.91 | | | - | .74*** | .44*** | -.17 | .38** | -.29* |
| d ICRS-S粘り強さ (T1) | 77 | 1-7 | 4.62 | 1.02 | | | | - | .35** | -.26* | .29*** | -.35** |
| e 本来感 (T1) | 76 | 1-5 | 3.11 | 0.85 | | | | | - | -.28* | .67*** | -.47*** |
| f 怒りの不快感 (T1) | 77 | 1-5 | 3.54 | 0.67 | | | | | | - | -.34** | .66*** |
| g 本来感 (T2) | 82 | 1-5 | 3.10 | 0.71 | | | | | | | - | -.15 |
| h 怒りの不快感 (T2) | 82 | 1-5 | 3.58 | 0.72 | | | | | | | | - |

注) T1 = Time 1, T2 = Time 2。

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

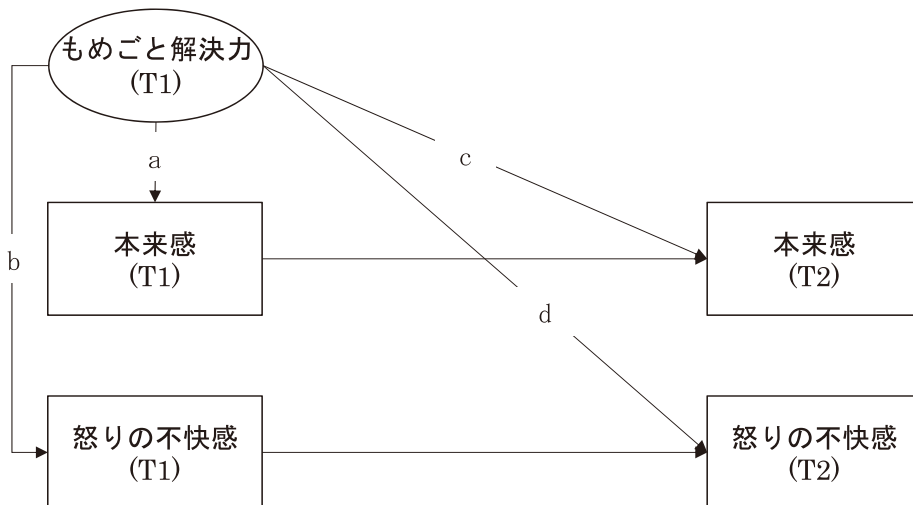


Figure 1 本研究で仮定されたモデルとパスのラベル

注) T1 = Time 1, T2 = Time 2

Table 2 各モデルの適合度

| Model | χ^2 | df | p | CFI | TLI | RMSEA | AIC | constrained |
|-------|----------|----|------|------|------|-------|--------|-------------|
| 1 | 30.402 | 16 | .016 | .937 | .857 | .093 | 86.402 | none |
| 2 | 41.105 | 17 | .001 | .894 | .775 | .117 | 95.105 | a |
| 3 | 30.420 | 17 | .023 | .941 | .875 | .087 | 84.420 | b |
| 4 | 30.820 | 17 | .021 | .939 | .871 | .088 | 84.820 | c |
| 5 | 33.789 | 17 | .009 | .926 | .844 | .097 | 87.789 | d |
| 6 | 41.472 | 18 | .001 | .897 | .794 | .112 | 93.472 | a, b |
| 7 | 41.637 | 18 | .001 | .896 | .792 | .112 | 93.637 | a, c |
| 8 | 44.910 | 18 | .000 | .882 | .763 | .120 | 96.910 | a, d |
| 9 | 30.836 | 18 | .030 | .944 | .887 | .083 | 82.836 | b, c |
| 10 | 33.816 | 18 | .013 | .930 | .861 | .092 | 85.816 | b, d |
| 11 | 33.863 | 18 | .013 | .930 | .860 | .092 | 85.863 | c, d |
| 12 | 42.005 | 19 | .002 | .899 | .808 | .108 | 92.005 | a, b, c |
| 13 | 45.236 | 19 | .001 | .885 | .781 | .115 | 95.236 | a, b, d |
| 14 | 45.002 | 19 | .001 | .886 | .783 | .115 | 95.002 | a, c, d |
| 15 | 33.890 | 19 | .019 | .935 | .876 | .087 | 83.890 | b, c, d |
| 16 | 45.335 | 20 | .001 | .889 | .799 | .110 | 93.335 | a, b, c, d |

注) CFI=Comparative fit index, TLI=Tucker-Lewis index, RMSEA=Root mean square error of approximation, AIC=Akaike's information criterion

このうち，“constrained”は、Figure 1に示した該当するパスの相関を0と仮定したことを示している。分析の結果、ICRS-Sが本来感（T1, 2）および怒りに対する不快感（T1, 2）に影響を及ぼさないと仮定するModel 16は、許容できる適合度を示さず（ $\chi^2(20) = 45.335$, $p = .001$, CFI = .889, TLI = .799, RMSEA = .110), AIC (Akaike's information criterion) も比較的高い値を示した (AIC = 93.335)。一方、本研究で仮説モデルとして挙げた、ICRS-Sが本来感（T1, 2）および怒りに対する不快感（T1, 2）のすべてに影響を及ぼすと仮定するModel 1は、許容できる適合度を示し（ $\chi^2(16) = 30.402$, $p = .016$, CFI = .937, TLI = .857, RMSEA = .093), AIC (Akaike's information criterion) も比較的低い値を示した (AIC = 86.402)。さらに、ICRS-Sが本来感（T1, 2）や怒りに対する不快感（T1, 2）のいずれかに影響を及ぼすと仮定し、いくつかのモデルを比較検討したところ、Model 9が、もっとも適合度がよく（ $\chi^2(18) = 30.836$, $p = .030$, CFI = .944, TLI = .887, RMSEA = .083), AICも低い値を示した (AIC = 82.836)。そこでModel 9を採用することにした。

このモデルでは、もめごと解決力が調査時点における本来感と、3ヶ月後の時点における怒りの不快感を予測することが示されている。つまり、もめごと解決力は、調査時点の本来感に中程度の正の影響を与えており（ $\beta = .42$, $p < .001$), 3ヶ月後の怒りの不快感にも弱い負の影響を与えていた（ $\beta = -.18$, $p < .10$ ）。

Model 9の結果をFigure 2に示す。

考 察

本研究の目的は、もめごと解決力が、本来感や怒りに対する不快感にどのように影響するのかを、短期縦断的、探索的に検討することであった。ICRS-Sが、本来感（Time 1, 2）、怒りに対する不快感（Time 1, 2）に与える影響を共分散構造分析によって検討した結果、ICRS-Sが調査時点における本来感と、3ヶ月後における怒りの不快感を予測すると仮定したモデルが、もっとも適合度が高いことが示された。また、このモデルでは、ICRS-Sは調査時点の本来感に中程度の正の影響を与え、3ヶ月後の怒りの不快感に負の影響を与えていた。このことから、もめごと解決力は、調

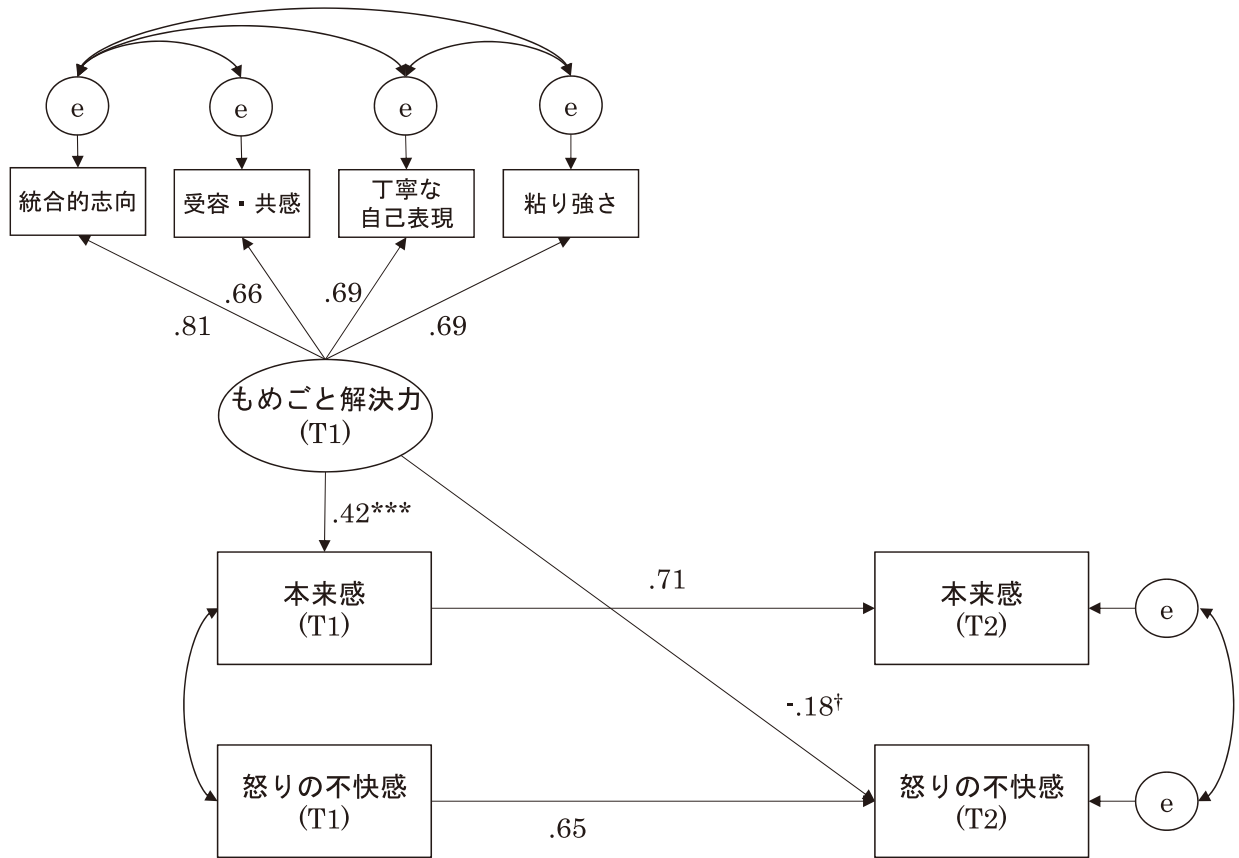


Figure 2 共分散構造分析 (Model 9) の結果

† $p < .10$, *** $p < .001$

査時点における本来感を向上させるだけではなく、3ヶ月後の怒りに対する不快感を低減させることもうかがわれる。

もめごと解決力が同時点における本来感を向上させるという結果は、益子 (2013) と同一のものである。また、本研究で示された β は.42であり、益子(2013)で報告された.65とほぼ同水準であった。このことから、もめごと解決力が本来感に中程度の影響を与えるという効果の一定の頑健性が確認されたといえるだろう。もめごと解決力は、他者との意見や価値観の相違が見られたとき、相手の関心や希望を尊重しつつも、自分の関心や希望を叶えようとするスキルである。このような特徴が、もめごとの渦中であっても、自分らしくあることに奏功するのだろう。

ただし、もめごと解決力は3ヶ月後の本来感を予測していなかった。この結果は、現在のもめごと解決力は、未来の本来感に影響せず、過去のもめごと解決力も、現在の本来感に影響しないこと

を示唆している。本来感は、来談者中心療法の目標とされてきた特性である (Truax & Carkhuff, 1967)。その来談者中心療法では、本来感の向上を達成するために、「いま、ここ」での体験を重視するという (諸富, 1997)。このことが示すように、過去にどうであったか (すなわち、過去にもめごと解決力があつたか) ということは、現在の本来感を規定する要因にはならないのかもしれない。

また、もめごと解決力は同時点での怒りに対する不快感は低減しないが、3ヶ月後のそれを低減させることも示された。怒りに対する不快感への影響にこのような時間差がみられたのは、怒りの不快感を低減するためには、自他の怒りの感情を適切に扱い、対処できたという経験が必要だからかもしれない。怒りに対する不快感とは、つまり、怒りという感情に対する恐れや忌避感情である。恐れや忌避感情は、一般的に、成功体験によって低減すると考えられている。もめごと解決力が備

わっている人は、たとえある時点では怒りの感情を恐れたり、忌避したりしていても、もめごとの渦中にあり怒っている相手には、うまく対処しやすい。また、自分が怒っていたとしても、うまく対処しやすい。そのため、自他の怒りの感情に対処できたという成功体験を得やすいと考えられる。しかし、その経験を得るためには、一定の時間が必要である。そのため、もめごと解決力は、同時点における怒りに対する不快感を低減させるのではなく、3ヶ月後に低減させるのかもしれない。

これらの結果は、もめごと解決力を向上させる心理教育プログラムが、本来感を向上させる一方、怒りに対する不快感を低減させる効果を示したという益子(2017)の報告に、新たな知見を提供するものである。この2つの変数ともめごと解決力に関連し、プログラムによって適応的な方向に変化する変数であることは、共通している。しかし、本研究の結果からは、その変化の機序は異なると考えられる。すなわち、本来感は、現在のもめごと解決力に規定され、その向上とともに変化する。一方、怒りに対する不快感は、もめごと解決力を備えた上で、実際にもめごと解決を行うことによって、高まるものと考えられる。

まとめと本研究の限界

本研究では、もめごと解決力が、本来感や怒りに対する不快感にどのように影響するかを、短期縦断的に、探索的に検討した。もめごと解決力が、現在、および3ヶ月後の時点における本来感と怒りに対する不快感に与える影響を、共分散構造分析によって検討した結果、もめごと解決力は、調査時点の本来感および3ヶ月後の怒りに対する不快感を予測することが示唆された。この結果を踏まえて、もめごと解決力がいかに適応を高めるのかという視点から議論した。

本研究の限界として、第1に、もめごと解決力の予測力を検討するために使用した変数が限定的だったことが挙げられる。本研究で予測力を検討

するために用いた変数は、本来感と怒りに対する不快感であった。しかし、もめごと解決力に関連する変数は、これらに留まるものではないと思われる。たとえば、益子・本田(2017)は、心理教育においてもめごと解決力が向上したことに伴い、心理的ストレス反応が低下し、友人満足度が向上したことを報告しており、もめごと解決力とストレス反応や友人満足度の間にも、何らかの関連があることが予想される。このように、本研究では検討できなかった他の変数との関連についても、検討する余地が残されている。

第2に、1度目と2度目の調査を行った期間が比較的短かったことが挙げられる。本研究では、もめごと解決力に関する縦断的研究の端緒とするべく、3ヶ月間という期間を設定した。しかし、もめごと解決力の予測力をより詳細に検討しようとするならば、1年、2年のような、長期間に渡る縦断的研究を行う必要もあるだろう。今後の検討が望まれる。

以上のような限界はあるとしても、本研究では、もめごと解決力という新しいソーシャルスキルが、将来の適応をどのように予測するのかについて、一定の知見を示すことができた。これまで、外部から介入されない縦断的研究において、もめごと解決力が将来の適応にどのように影響するのかを検討した研究は存在しなかった。本研究の意義は、もめごと解決力の適応に対する予測力について、一定の知見を提供したことであると思われる。

引用文献

- Anderson, J. C., & Gerbing, D. W. (1988). Structural equation modeling in practice: A review and recommended two-step approach. *Psychological Bulletin*, 103, 411-423.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum.
- 後藤 学・宮城 速水・大坊 郁夫 (2004). 社会的スキル・トレーニングの効果性に関する検討——得点変化のバ

ターンに見る参加者クラスタリングの試み—— 電子情報通信学会技術研究報告, 104(198), 7-12.

Gresham, F. M. (1986). Conceptual issues in the assessment of social competence in children. In P. S. Strain., M. J. Guralnick., & H. M. Walker. (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification* (pp. 143-179). New York: Academic Press.

本田 真大・藤枝 静暁・益子 洋人・中井 大介・冨家 直明 (2017). 小・中・高校生の現代的な課題の解決に資するソーシャルスキル教育——感謝, 統合的葛藤解決, 援助要請—— 日本カウンセリング学会第50回記念大会発表論文集, 64.

巖谷 奈々 (2001). 感じない子どもころを扱えない大人 集英社新書

伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.

加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.

菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店

益子 洋人 (2013). 大学生における統合的葛藤解決スキルと過剰適応との関連——過剰適応を「関係維持・対立回避的行動」と「本来感」から捉えて—— 教育心理学研究, 61, 133-145.

益子 洋人 (2017). 教員養成課程に在籍する大学生の統合的葛藤解決スキルの向上を目指す心理教育プログラムの効果 学校メンタルヘルス, 19, 142-152.

益子 洋人・本田 真大 (2017). 統合的葛藤解決スキルと学校適応感, ストレス反応の変化——中学生を対象とした心理教育プログラムの効果検討—— 日本カウンセリング学会第50回記念大会発表論文集, 184.

松山 早希・大坊 郁夫・横山 ひとみ・藤原 健・谷口 淳一・磯 友輝子 (2011). 対人認知課題を用いた社会的スキル・トレーニングの効果 電子情報通信学会技術研究報告, 111, 183-188.

西村 多久磨・福住 紀明・藤原 和政・川村 茂雄 (2017). 学校生活満足度に対するソーシャルスキルの予測力 心理学研究, 88, 162-169.

大河原 美以 (2004). 怒りをコントロールできない子の理解と援助——教師と親のかかわり—— 金子書房

坂上 裕子・菅沼 真樹 (2001). 愛着と情動制御——対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連—— 教育心理学研究, 49, 156-166.

Thomas, K. W. & Kilmann, R. H. (1974). *Thomas-Kilmann conflict mode instrument*. Tuxedo, NY: Xicom.

Truax, C. B., & Carkhuff, R. R. (1967). *Toward effective counseling and psychotherapy: Training and practice*. Chicago, IL: Aldine.

謝 辞

調査への協力依頼を快く引き受けて下さった、北海道教育大学札幌校の青山眞二先生、池田千紗先生、齊藤真善先生、千賀愛先生、本庄十喜先生、三浦哲先生、安井友康先生、同釧路校の浅井継悟先生に、心から感謝申し上げます。また、貴重なお時間を割いて調査に協力して下さった学生の皆さまに、厚くお礼を申し上げます。

(札幌校准教授)